



Title	英語群子音の内的機序（Ⅲ）：言理学的探求
Author(s)	林, 栄一
Citation	大阪外大英米研究. 1962, 3, p. 14-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98940
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英語群子音の内的機序(Ⅲ)

——言 理 学 的 探 究——

林 栄 一

0. はしがき 本篇は、1.「言語の内的機序」(「構造言語学」Vol. Ⅱ, Pp. 23-37), 2.「英語における音節の内的機序」(*Anglica*, Vol. 4, No. 2, Pp. 69-84), 3.「英語における Post-Vocalic/r/ の内的機序」(中山教授 還暦記念「英米文学論叢」Pp. 269-280), 4.「英語群子音の内的機序(Ⅰ)」(「英語学」Vol. Ⅰ, Pp. 51-67), 5.「英語群子音の内的機序(Ⅱ)」(大阪外大「英米研究」Vol. Ⅱ, Pp. 1-14)に続く最終篇で、これまで紙面の関係で触れることができなかった語中母音間群子音(Medial Consonant Cluster)を取扱うものであります。

本稿を加えて6篇になるこの一連の試みは、英語の音節構造を、言理学(Glossematics)的立場から、内面的に解明することを目的とするもので、それが成功しているかどうかは、読者諸賢の評価にまたなければなりません。音節構造の中に言語的宇宙の縮図を認める立場は、ある程度首肯される面があるようです。なぜかならば、音節こそ言語が存在する基盤であるからで、音声面の自立形式として最も本源的な単位といえるでしょう。音節が音素論(Phonemics)的に無意味か有意味かは問題がありますし、また音節とは一体どんなものかということについても決定的な所説はないのではないかと思います。それにもかかわらず、この単位を無視することが許されないところに、コトの機微があるというものです。

ところで、音節というものがよくわからないというのは、これを実在界における現象として実質(Substance)的に捉えようとするからで、言理学は純粹に形式(Form)の面から規定しようとしします。そのため、時によっては循環

論になることが考えられますが、現実には相対的にこそ規定されるものですから、それがむしろ正鵠を得ている場合があります。この観点からしますと、言語学的には、音節は Accent Syntagm=Accent←Accent Theme ということになります。←印は一方依存 (Determination) ということ、AとBの両項がある場合、一方の存在が他方の存在に不可欠であるがその逆は成立しない関係を示します。すなわちA←BまたはA→Bであります。AとBが互に相手の存在を必要とする関係は、相互依存 (Interdependevrce) でA↔Bで表わします。互に相手の存在が不可欠でなく併存する関係を相互無依存 (Constellation) といい、A—Bの記号で示します。

内的機序とは内在的 (immanent) な機能 (Function) の秩序 (Order) ということ、その意味するところは今までにいろいろと述べてきたのでここでは縷説を避けますが、要は構成素の対立 (Contrast) 関係である系合 (Paradigmatic) と構成素の連立する様相である統合 (Syntagmatic) の両秩序において、項目の依存関係を機能として捉えることによって、言語に内在する理法を明らかにすることを目的とするものです。英語の音節構造の内的機序はかなり複雑ですが、これについては先行の諸篇でそれぞれ詳説しましたから、今更繰返すことは致しません。ただ、従来わかりきったこととして看過してきた平凡な事実も、仔細に検討してみると案外に微妙なカラクリが発見されるもので、本篇に関係のある群子音 (Consonant Cluster) も、既に観察した頭韻 (Initial) と尾韻 (Final) の場合、幾つかの興味ある事実が明らかになったのでした。ところが、群子音の場合頭韻と尾韻だけではまだ片づかない問題が残っているわけで、それがここで取扱う語中母音間群子音 (Medial Consonant Cluster) ですが、これについて分析の操作を開始する前に、若干の事項を明らかにしておかなければなりません。

1. 語中母音間群子音 まず群子音ということですが、これは単子音 (Simple Consonant) に対するものです。ということは、構造的単位として両者が等価値であるということで、これは単純核音 (Simple Nucleus) と複合核音

(Complex Nucleus) の関係と同じであります。このことは、pit/pit/ と print/print/ の /p-/:/pr-/ および /-t/:/-nt/ は等価値でありますが、you/jùw/ と cute/kjàwt/ の /j-/:/kj-/と /-w/:/-wt/ は異なる範疇に属することにおいてよく示されています。(この場合 /-u-/と/-juw-/ とは等価値であると考えなければなりません。) これは系合の問題でありまして、/p-/ ←/pr-/、/-t-/←/-nt/ という一方依存の機能が認められます。(相互依存の ⇔ ではないかという考え方もありますが、単子音があつて群子音が在存し得るのであってその逆ではないはずで、単子音同志では当然に相互依存であります。群子音同志では相互無依存になると思われまゝ。) ところで、頭韻と尾韻の場合はこのように群子音は単子音と対照されますが、語中母音間では特に refer する単子音の相手がありません。というよりは、頭韻や尾韻や頭尾両韻の単子音または群子音という不特定なものであります。(いわゆる跨節的 (ambisyllabic) な単子音とも関係を持ちますが、これも結局は頭韻か尾韻に分類されることになります。) この点が頭・尾韻群子音と異なっています。従つて、群子音でない子音結合にすぎない場合もあることになります。

統合的にみますと、要するに単子音の連続が頭・尾韻に分れるということにすぎないので、問題は簡単に処理できそうにみえますが、実際はそうは問屋が卸しません。一体に群子音は系合的にはむしろ簡単なことなのでして、実は大部分が統合面における解釈なのであります。たとえば-AB-の場合でも、-A+B-、-AB、AB-の3種が区別されることになりますが、AB が頭韻または尾韻における群子音の型に入っているかどうか問題ですし、その場合でも頭韻だけか尾韻だけか或いは両方にあるのかも問題です。しかもAとBとの間の間の統合的機能が⇔、←or→、一によつてもむづかしい問題が生じます。(尤もそのすべての階乗にはならないことは自明であります。) これが-ABC-、-ABCD-となれば、いよいよ複雑な事情が生ずるわけです。meddler と medlar といったような問題も当然考慮されねばなりません。頭・尾韻での群子音が、中間で両断される条件なども複雑であります。

それから、語中母音間ということですが、母音間 (inter-vocalic) とは核音間 (inter-nuclear) であることはいうまでもないとして、語中ということに限定したことに關しては付言しておく 必要がありましょう。というわけは、medial consonant cluster は語と語との連続においても生ずるのですから、何故それを勘定に入れなかったかということになります。B. F. Wallace の *A Quantitative Analysis of Consonant Clusters in Present-Day English* は medial combination として worked through のような -rktθr- のような連続を挙げています。しかし、これらは語の区初りで一応わけることができすし、このような結合では予見性 (Predictability) をもつことは困難であります。本シリーズでは操作の枠を単純語 (Simple Word) に限定していますが、これは現実に存在する言語の単位としては音節を担うことのできる最小の自立形式であるからです。従って、中間群子音の場合も単一語の中で現われるもののみを観察する方が筋が通るわけで、それだけで必要にしてかつ十分であり、語間に現われる例も可能性は含まれていますし、それを問題とする場合には語という単位によって分離することができます。(たとえば banned it と bandit とは実際上は発音が同じであるので、連接 (Juncture) による区別は不可能であるということもありますが、そのことについては後で触れるとしまして、それにしても、それとこれとは問題が別であります。音声を取扱うときに形態論をもちこんではいけないという主張は一つの見識であります。それは絶対的であるわけではなく、段階的立場をとるからそういえるにすぎませんし実際上はかえって自縛的であることさえあるのは、しばしば指摘されている通りです。言理学では立場が異なっていますから決して不都合ではありません。) 群子音といっても、中間のものは、このような問題が生じなかった頭韻や尾韻の場合と異なることは、ここにも示されていることに注意しなければなりません。

それでは、群子音というのは misnomer ではないかということになります。が、必ずしもそうでないのは、群子音である場合もあること、頭・尾韻群子音

の決定にこの子音連続体が関与してくる場合があります。つまり、尾韻+頭韻ということにおいて、それぞれの群子音が制限を受けるということで、単に頭・尾韻だけを眺めていてはわからない事実が発見されます。このことは後述の内容によって次第に明らかになりましょう。

2. 接続 アメリカの構造言語学者はしばしば接続 (Juncture) ということを行います。これは極めて便利な術語で、音節を分ける場合でも発話 (Utterance) や語 (Word) をまとめる場合でも随時使用することによって、音素論的レベルに形態論をもちこむことを避けています。接続とは音の連続がどのような状態で移行するかという transition の問題で、正常移行 (Normal Transition) のことを閉鎖接続 (Close Juncture)、然らざる場合を開放接続 (Open Juncture) とし、一般に後者を内部開放またはプラス接続 /+/ および末尾接続 /|, ||, #/ に分けています。ところが、この接続というものの正体がもう一つハッキリしません。元来は Joos が実験音声学に基いて発見したというのですが、接続の前で音声の引き伸ばしがあることが、主要な特性であるとされています。しかし、最近には反対論もあり、またこれと pause との関係は微妙ですし、各人適宜に解釈して使用しているようで、そのことは Hamp の *Glossary* をみてもわかります。morphology においてこれを使用する場合には、特に vicious circle になるおそれが大であることは、Pike が指摘する通りですし、我が国では服部四郎氏が懐疑的です。またこれが phoneme であるのかないのか、phoneme としたら segmental か supra-segmental かもアイマイであります。Hjelmslev が juncture に対して批判的であるのもうなずけるのです。よく示される nightrate と nitrate と Nye trait (米音) や Dandid, banned it, banded, bandit 等にしても、実は接続の開閉や位置は形態的要因によって区別されているのですし、a name と an aim にしても、果してプラス接続があるのかないのか、仮にあるという立場をとるにしても、それは M. Fowler ("Stress-determined Allophones in English," *Word* 16. 344-47) のいうように結局 Sweet の所説に帰ること

になるのかもしれないのです。ということも、煮じつめれば形態論の問題でありましょう。ただ一寸注意をひくのは、blitzed/blɪtst/と midst が/mɪtst/となる場合の/-tst/ですが、これも実は両方とも普通のものではありませんし、また存在するものは認めなければならないとしても、所詮形態を離れた現象ではないはずですので、連接ということは言理学的には問題にしないでよいと思います。Nutchelと nutshellの/-tʃ-/にしても同様な解釈が成立しましょう。

3. とぎれ しかしながら、音声表現の面で観察する限り、音の移行に区別が認められる事実は全く無視することはできませんから、何らかの工夫によって、この現象を形式化して音声表記を行う必要があります。ここにおいて、筆者は立場を異にする人達からは強硬な異論や反対が出ることを当然に予想しつつも、あえて「とぎれ」という supra-segmental phoneme を設定したいと考えます。開放連接というのは、どのような説明が与えられているにせよ、結局は音の移行に何ほどこかの「とぎれ」があることに起因していると考えられます。休止ではないと強調されていることが、休止と無関係でないことを証明しているのではないのでしょうか。すなわち、正体が判然としない開放連接とは、「とぎれ」によって生ずる実質であるとみるわけです。「とぎれ」がない開放連接があるではないかと抗議されるかもしれませんが、それは実質面の問題で、「とぎれ」は潜在的 (latent) なものであります。過程 (Process) の奥には体系 (System) がなければなりません。

連接を閉鎖と開放にわけることよりも、音の正常移行は問題にする必要はないのですから、最初から正常移行に介入する要素だけ考えたらよいわけです。それから supra-segmental と考えたのは、なるほど「とぎれ」は話線上に現われるものですが、segmental phonemeそのものとは別なもので、segmental phoneme の連続を仕切る枠でありますから、「かぶせ」るものと解釈するのが当然です。(因みに連接を認める立場では連接こそ segmental phoneme と考えるべきでしょう。)

ところで、「とぎれ」といっても、いろいろなものがありますが、もしこれ

を時間的な長さという実質で区別しようとする、絶対的なものはないわけですから、拾収がつかなくなります。従って、これも形式的に規定しなければなりません。そこで、まず無限の silence に連がるものを考えてみますと、morphemics で文と呼ばれるもので代表される 発話の終りにくる 休止があります。これを末尾とぎれ (Terminal Pause) とし/#/ で示します。次に発話の途中で、いわゆる breath group ないし sense group をなすもののに伴い rhythmic unit を構成する休止が考えられます。これは必ず有限である休止で、中位とぎれ (Medial Pause) と称し/|/で表記します。第3に形態論的には語という最小の転位 (Permutation) をもつ音声連続体に続く休止がありますが、これは外部とぎれ (External Pause) と呼ばれ /+/がその表記となります。第4にその語が2音節以上から成立している場合、もし切断するとすれば分れ得るところに生ずる休止で、これを内部とぎれ (Internal Pause) と名づけ/-/で示します。最後に音節の内部において morphemic boundary に生ずる休止が考えられますので、これを組成とぎれ (Componential Pause) とし/・/で表記します。以上の5つの pause phoneme は、いずれも 可能性をもつが実現するとは限りません。しかし、それは「ない」ののではなくて「ある」のでして、たとえば英国英語の far は [fa:] ですが、これは /fáər/ と解釈しなければならないのと同じであります。(末尾とぎれと雖も実際は無限ではないでありましょう。)上の5つの区別は決して実質的な時間の長さによるものでないことも諒解されなければなりません。連接の相違ということなれば、せいぜいプラスと末尾の2つにしか開放連接は認められませんが、「とぎれ」の立場からは、互に対立 (Contrast) をなして5つが認められるわけです。付言しなくてはならないのは、“Dog!”のようなone word sentence では理論上は/#|+dóg+|#/ となるわけですが、このような場合には上位のとぎれが下位のとぎれを代表しますので、“Dog!” は /#dóg#/ と表記されます。なお、念のため説明しておきますと、a name と an aim は実際上は [enéim] で同一になることが多いでしょうが、前者は /#A+néjm#/ 後者は /#An+?éjm#/

でありますから、場合によっては〔ə neim〕と〔ən eim〕となることもあります。（逆はありません。）また、blitzedは/blíts·t/, midst〔mitst〕になる場合には/mít·st/のようになります。John's (hat)の〔dʒanz〕も /dʒón·z/ということもありうるわけです。

4. 分節 語中母音間群子音があるということは、音節がそれを挟んで3つの可能性の1つにおいて分かれるということでもあります。ところで、この音節が分かけるということはどういうことなのでしょう。もともと、音節とは何であるかということ自体が、非常にむづかしい問題であることは、最初に述べた通りでありまして、本シリーズではこれを Accent Syntagm と解釈するわけですが、この立場は音節という単位は音素論にも 有意味である とみるものです。しかし、反対の意見もあるわけでした、その考え方によれば分節の問題も当然に無意味であります。殊に分節に関しては言語学者の中にもいろいろ批判的な発言があり、分節は実際は存在しないものだとか、puerile な努力だとか個人のクセであって規準はないとか、物理的なものでなくて心理的なものであるとか、どのようにしても勝手であるとか、等々の意見があります。それぞれ一理あるのですが、音節を有意味な単位であるとみる立場に立つ限り、分節は当然付随してくる問題で、言語の音声を記述するのに触れないでおくことはできません。

本シリーズでは、音節はAcceut Syntagm=Accent←Accent Theme と解釈しますので、分節の原理はそこから出てきます。詳しいことはAnglica 所載の第2篇にありますが、必要な個所だけを述べてみると、英語においては単一語を枠とすると/'/, /˘/, //の3つのアクセントがあり、その系合的機能は(/' /←/˘ /) ↔// であり、その統合機能は /' /←(/˘ /-//) であります。これとアクセント幹との関係は、(/' /←/˘ /)←/INF/, //←(/INF /←/IN /←/N /) です。I は頭韻 (Initial) Fは尾韻 (Final) を示し、共に随音(Satellite)のことで大体子音(Consonant)に相当し、N音は核音(Nucleus)のことで大体母音(Vowel)にあたります。それぞれ単純なものと複合のものがあります。それらのメン

バーに関しては、詳しくは第3篇（主として核音）、第4篇（主として頭韻）第5篇（主として尾韻）を参照して頂きたいと思いますが、単純なものだけを示しますと、随音としては /ʔ-, h-, -(p, b, t, d, k, g, f, v, θ, ð, s, z, ʃ, ʒ, m, n, l, r, j, w)-, -ŋ, -ə/, 核音としては /i, e, a, o, u, ʌ/ があります。）アクセント構成素との関係で注意すべきは $[(/ \leftarrow / \leftarrow /) \leftrightarrow //] \leftarrow [(I - / \leftarrow /) + /i, ʌ, u/ + (/ \leftarrow / - w, j, ə/)]$ でありまして、この場合にはアクセント幹がどのアクセントに依存するかは理論上は決定はできませんが、実際上はアクセント分布の大体の傾向により大きな不都合は生じません。

以上により分節の原則は明らかになりましたが、具体的に処理する段になると、若干の問題があります。その1つは跨節的 (ambisyllabic) なものはどうするかということです。たとえば happy/hápi/の /-p-/ です。これを /háp-pi/ とする案もありますが、本稿では機械的に上の原則に従い /háp-i/ と分節されます。しかし、これには /há-pi/ でなければならぬという立場がありまして、Kurylowicz (‘Contribution à la theorie de la syllabe,’ *Bulletin de la société polonaise de linguistique*, 8, 1948, pp. 80ff.) の所説に従い Söderberg (*A Typological Study on the Phonetic Structure of English Words with an Instrumental-Phonetic Excursus on English Stress*, 1959) はそのような分節を示しています。Maloneが shilly を /hí-li/ としていたり、Fowlerが filly を /fi-li/ として fully/fúl-i/ に対立させているのなどは、理由は異なりますが、やはり注目すべきでしょう。このことに関連して $// \leftarrow (/IN/ \leftarrow /NF/)$ の問題があります。音節において頭韻の方が尾韻に優先するのは、普遍的な事実ですので、これを建前とすることによって強強勢と結ぶ音節に /ʔ-/ が考えられるのですが、弱強勢の場合もこれを一般化すると上の公式が成立します。しかし $// \leftarrow /NF/$ をも否定するのは、「尾韻が存在するためには、次に続く音節に当然頭韻が存在しなければならない」という前提をたてての話で、これは慎重な検討を要しますが、群子音の場合には重要な事柄であります。ところで、この傾向に対する例外として、いわゆる

成節子音 (Syllabic Consonant) があることを、この際申しておかねばなりません。すなわち *reasanably* は /rɨjzAbAnAli/ と解釈されますが、〔l, m, n〕=Al, Am, An/(〔r〕については別に第3編で詳論してあります) となりますけれども、これらは特例としてそれぞれ1単位ですので、/rɨj-zAn-A-bal-li/と分節されます。

群子音の場合、*hundred* の /-ndr-/ は /-ndr, ndr-/ が存在しないので、/-nd/+ /r-/ か /-n/+ /dr-/ かにならねばなりませんが、上に述べたような頭韻優先により /h'ɨn-drid/ に分節されることになります。expressの /-kspr-/ のような場合にも、同じ理屈によって /ik-sprés/ とする方がよいと思われます。(Jones は /iks-prés/ を執っていますが、分綴と分節とは一応区別しなければなりません。) *mistake* は /mis-téjk/ と /mA-stéjk/ の両方がありますが、これはもちろんうなずけるでありましょう。*nightrate* と *nitrate* と *Nye trait* は /nájt+rèjt/, /náj-trèjt/, /náj+trèjt/ (/'/ と /~/は文強勢) のように 区別されるべきであると考えます。また *meddler* 〔médlə(r)〕と *medlar* 〔médlə(r)〕は /méd-Al-Ar/ と /méd-lar/ です。し、*trouble* は /tráb-Al/, *troublous* は /trab-las/, *abloom* は /A-blúwm/ です。(ablution が /Ab-lúw-fAn/ であるのは、本当は /-b·l-/ であるからであります。) 最後に *nutshell* と *Nutchel* は /n'ɨt+fèl/ と /nátf-Al/, *ledger* と *suggest* は /lédʒ-Ar/ と /sA-dʒést/ であります。すなわち /-tʃ-/ と /-dʒ-/ は単一語中にあっては前後の音節の頭韻になるか尾韻になるかのどちらかで、前後の音節に /t/ と /ʃ/, /d/ と /ʒ/ が別々に分かれて帰属するということがありませんので、これは単なる cluster でなく複合の群子音であるといえましょう。(nutshell は内部とぎれとなりますので同日に論ぜられませんが) ただし、あくまで /t/↔/ʃ/, /d/↔/ʒ/ という一方依存でして、ポーランド語における *trzy*/t·ʃi/ (=three) と *czy*/tʃi/ (=whether) のような同一音節内における対立はないので、1音素にまで煮つめることには、やや躊躇が感ぜられます。č/ は /t/↔/ʃ/ という相互依存であらねばなりません

から。(しかし英語では/č/と/j/を認めることは便法としては特に反対する理由はないことがここで証明されたわけです。)これに比べると/-ts-/と/-dz-/は tsetse/tsét-si/, sudsy/súd-zi/ となって前後の音節に別々に分かれてつきますので、複合群子音とはいえないことがわかります。

5. 語中母音間群子音の種類 以上の手続きに従って、普通一般に使用される単一語(複合語は除外)を、三省堂コンサイスに**および* がつけられたものの中から2音節語以上について、その中の母音間群子音をもつものの実態を調べてみました。分節の標準はACDに準拠し、同一綴りの語でアクセントによって別語となるものはそれぞれ1語に計算してあります。カッコの中には代表的な語を書いておきました。その頭につけたAはfore-stress Bはend-stressを示すものです。例語の次の数字は同類の語数であります。なお、*をつけたものは、この語彙中にはないのですが、極めて普通ですので、1語ずつ臨時に加えたものです。

(I) 2重群子音: 1. b-d(B subdue 1) 2. b-h(B abhor 1) 3. b-l(A public 6) 4. -bl(B sublime 3) 5. b-m(B submit 2) 6. b-r(A fabric 1) 7. -br(B abrupt 2) 8. b-s(A absent 1, B absurd 6) 9. b-t(B obtain 1) 10. b-v(A obvious 1) 11. d-b(B goodbye 1) 12. d-f(A dreadful 2) 13. d-h(B adhere 1) 14. d-l(A pedlar 11) 15. d-m(B admit 1) 16. d-n(A kidney 6) 17. d-r(A squadron 1) 18. -dr(B address 2) 19. dʒ-(A budget 8) 20. -dʒ(A major 12, B digest 6) 21. d-s(A hardship 2) 22. d-v(A adverse 2, B advice 4) 23. f-l(A ruffle 4) 24. fl(A trifling 1, B reflect 3) 25. f-r(A suffrage 1) 26. -fr(B refrain 3) 27. f-t(A lofty 4, B fifteen 1) 28. -gl(A burglar 1, B neglect 1) 29. g-l(A ugly 1) 30. g-m(A dogma 6, B augment 1) 31. g-n(A signal 4) 32. g-r(A* segregate 1) 33. -gr(A fragrant 3, B regret 3) 34. g-z(A zigzag 1, B exalt 7) 35. -hw(B awhile 1) 36. k-l(A reckless 6) 37. -kl(B decline 7) 38. k-n(A picnic 7) 39. k-r(A secretary 1) 40. -kr(A secret 2, B across 4) 41. k-s(A taxi 7, B success 9) 42. k-t(A actor 11, B* rectangular 1) 43. k-f(A action 2) 44. k-w(A liquid 2) 45.

-kw(A equal 2, B equip 5)46. l-b(A album 1) 47. l-d(A seldom 9)
 48. l-f(A selfish 4, B fulfil 1) 49. l-g(A vulgar 1) 50. l-h(A girlhood
 1) 51. l-k(A falcon 4) 52. l-m(A helmet 2) 53. l-n(A walnut 5) 54.
 l-p (A pulpit 2) 55. l-r (B already 2) 56. l-s (A wholesome 1) 57.
 l-t (A shelter 8, B alternative 1) 58. l-θ (A filthy 2) 59. l-ð (B
 although 1) 60. l-v (silver 1) 61. l-w (A always 2) 62. m-b (A
 nimble 26, B bamboo 3) 63. m-f (A comfort 2, B emphatic 1)64.
 m-l (A hamlet 11) 65. m-n (A remnant 2) 66. m-p (A pompous
 14, B compel 67. m-r(A comrade 1) 68. m-s (B himself 2) 69. m-w
 (A homeward 1)70. m-z(A crimson 2) 71. n-b (A* cranberry 1)72.
 n-d(A tender 48, B condemn 12) 73. n-f(A infant 4, B confer 15)
 74. n-g(B engage 1) 75. n-h (A manhood 1) 76. n-k (A income 1, B
 incur 6) 77. n-l(A only 7, B enlarge 5) 78. n-m(A Denmark 1) 79.
 n-n (B unknown 1) 80. n-s (A cancel 17, B insist 20) 81. n-f (A
 conscious 8) 82. n-t(A winter 31, B intense 16) 83. n-θ (A anthem
 1) 84. n-v(A canvas 4, B involve 10) 85. n-w(A inward 2)86. n-z(A
 pansy 2) 87. n-j(A pinion 1) 88. η-d(A kingdom 1) 89. η-g(A finger
 13) 90. η-k(A conquer 16) 91. η-l(A kingly 1) 92. η-t(A Washington
 1) 93. η-θ(A lengthen 1) 94. η-z(B anxiety 1) 95. p-f(A hopeful 1)
 96. p-k(A napkin 1) 97. p-l(A poplar 4) 98. -pl(B apply 9) 99. p-m
 (A shipment2)100. -pr(A April 2, B oppress 16) 101. p-s (A gypsy
 1)102. p-f (A nuptial 2) 103. p-t (A captain 3)104. p-w(A upward)
 104. s-b(B* disband 1) 105. s-d (B disdain 1) 107. s-f (A useful 3)
 108. s-g(B disgust 2) 109. s-k(A basket 9, B discard 4) 110. -sk (B
 mosquito 5) 111. s-l(A bracelet 6, B mislead 1) 112. -sl(B asleep 1)
 113. s-m (A Christmas 3, B dismiss 3) 114. s-n (B carelessness 2)
 115. s-p(A prosper 5) 116. -sp(B respect 16) 117. s-t (A rusty 41, B
 mistake 2) 118. -st(B astonish 9) 119. -sw (B persuade 1) 120. f-f
 (A bashful 1) 121. f-l(A rashly 2) 122. f-m(A refreshment 1) 123.
 f-n(A freshness) 124. t-f(A artful 10) 125. t-l(A atlas 16) 126. t-m
 (A statement 2) 127. t-n(A partner 6) 128. t-r(A citron 2) 129. -tr

(A portrait 5, B attract 6) 130. t-s(B itself 1) 131. tf- (A pitcher 7) 132-tf(A feature 4, B achieve 2) 133. t-w (A outward 1) 134. -tw(B between 2) 135. θ-f(A youthful 2) 136. θ-l (A athlete 4) 137. θ-w(A southward 1) 138. v-l(A lively 4) 139. v-m(A movement 1) 140. v-n (A forgiveness 1) 141. v-r (A sovereign 2) 142. z-b (A husband 1) 143. z-d(A wisdom 3) 144. z-l(A muslin 2) 145. z-m(A dismal 1) 146. z-n(A business 1)

(Ⅱ) 3 重群子音: 1. b-d₃(A, B subject 3) 2. b-sk(B obscure 1) 3. b-st(A lobster 3, B abstain 1) 4. b-tr (B subtract 1) 5. d₃-m (A judgment 1) 6. ft-l(A swiftly 1) 7. ft-n(A swiftness 1) 8. k-sk (B excuse 2) 9. ks-p(A expert 2) 10. k-sp(B expel 2) 11. ks-t(A sixty 1) 12. k-st(B extend 3) 13. kt-f(A respectful 1) 14. kt-l(A strictly 1) 15. k-tr(A doctrine 1) 16. k-tf(A picture 3) 17. ld-h(A childhood 1) 18. ld-l(A coldly 3) 19. ld-n(A boldness 2) 20. l-d₃ (A soldier 1) 21. l-gr (A pilgrim 1) 22. ls-h (A falsehood) 23. lp-f (A helpful 1) 24. lp-l(A helpless 1) 25. l-pr (A culprit 1) 26. lp-t (A sculptor 1) 27. lt-l(A guiltless 1) 28. l-tr(A sultry 2) 29. l-tf (A culture 1) 30. lθ-f(A healthful 1) 31. m-bl(A emblem 3) 32. m-br (B embrace 1) 33. m-fl(A pamphlet 1) 34. m-pl (A simply 1, B complete 5) 35. m-pr(A empress 1, B improve 4) 36. mp-f(A assumption 1) 37. mp-t (A empty 2) 38. m-st(B circumstance 1) 39. nd-l (A kindly 6) 40. nd-m(A amendment 1) 41. nd-n(A kindness 2) 42. n-dr(A hundred 6, B undress 1) 43. nd-f (A friendship 1) 44. n-d₃ (A engine 10, B inject 4) 45. nd-w(A sandwich 1) 46. n-fl(A conflict 1, B inflame 3) 47. n-gr (A congress 1, B engrave 2) 48. n-kl (B enclose 3) 49. n-kr (A, B increase 1) 50. n-kw (B inquire 1) 51. n-pl (B unpleasant 1) 52. ns-f (A, B transfer 3) 53. ns-l (A senseless 1, B translate 1) 54. ns-m (B transmit 1) 55. n-sp (B inspect 1) 56. n-st (A instinct 5, B instead 2) 57. nt-l (A gently 3) 58. nt-m (A ointment 1) 59. n-tr (A central 6, B control 8) 60. n-tf (A venture 2, B enchant 1) 61. nθ--l (A monthly 1) 62. nz-d (A

wednesday 1) 63. nz-l(B translate 1) 64. ɲ-gl(A English 2) 65. ɲ-gr
(A angry 3) 66. ɲ-gw(A language 4) 67. ŋk-f(A thankful) 68. ŋk-l
(A frankly 2) 69. ŋk-f(A function 3) 70. ŋk-r(A bankrupt 1) 71.
ŋk-θ(A strengthen 1) 72. ɲ-kw(A vanquish 2) 73. p-tʃ(A capture
3) 74. s-gr(B disgrace 1) 75. sk-l(A briskly 1) 76. s-kl(B disclose
1) 77. -skr(B defcribe 4) 78. s-pl(B displace 2) 79. -spl(B display 1)
80. st-f(A wistbul 1) 81. st-l(A justly 4) 82. st-m(A investment 1)
83. st-n(A*justness 1) 84. st-p(B postpone 1) 85. s-tr(A nostril 5)
86. -str(B destroy 5) 87. s-tʃ(A question 6, B discharge 3) 88. st-w
(A westward 2) 89. tʃ-f(A watchful 1) 90. tʃ-m(A parchment)
91. tʃ-l(A richly 3)

(Ⅲ)4 重群子音 : 1. b-skr(B subscribe 2) 2. b-str(B obstruct 1)
3. k-skl(B exclude 2) 4. ks-kw(A exquisite 1) 5. k-spl(B explain 4)
6. k-spr(A, B express 2) 7. ks-tr(A extra 1) 8. k-str(B extreme 2)
9. ks-tʃ(A mixture 2, B exchange 1) 10. lp-tʃ(A sculpture 1) 11.
mp-tʃ(A sumptuous 1) 12. n-skr(B inscribe 1) 13. n-str(A minstrel
2, B construct 3) 14. ŋkt-l(A distinctly 1) 15. ŋk-tʃ(A punctual 1)

以上のものは決して網羅的なものではありません。あまり珍らしくないもので、星印がないために割愛したのも沢山ありますし、複合語を避けたために種類が少なくなっていることも重ねて申し上げます。なお、複核音は一切除いてありますから Yao Shen などの統計とは随分異なったものとなっています。しかし、母音間に現われる群子音の実態は、大体において明らかになったと思われます。このことから、いろいろ興味ある調査が可能です。たとえば、頭・尾韻群子音のすべてが現われていないことや、両韻に共通する群子音が「とぎれ」によって解体分離されることや、真の4重群子音が成立しないことなどは、英語の音節構造に新たな光を投げるものでありましょう。これらの結果を整理して、解釈を施す仕事が残っているわけですが、もはや紙面が許さなくなってきましたので、これはまた別の機会に発表させて頂きたいと思います。なお、以上6篇にわたる英語の音節構造の調査を総合して、音節の種

類と数を示したいと考えております。（以前に調べたものでは約 3,500あまりの種類がありますが、これは分類規準が異なりますので、もう一度やり直してみらつもりです。）例によって例の如しで、本稿も仕事を残しつつ終ることになりましたが、考えようによっては、これが当然の姿でありまして、問題は無限に生ずるはずであります。学問の道、真理の探究はどこまで行っても果てることはないでしょう。筆者のような浅学菲才の身は、とりわけて、試行錯誤を続けて行かねばなりませんまい。